アンダーライティング協会

新代表理事星子敏郎氏インタビュー

経験生かし次世代の育成に注力

高度専門職である生命保険のアンダーライターの育成と認知度向上に取り組んでいる日本アンダーライティング協会では、6月の理事会で住友生命の星子敏郎氏が新たな代表理事に就任した。同氏は、住友生命のアンダーライティング部門に従事する中で、告知書の電子化や引受け査定前の診査基準・告知内容・範囲の見直しなど引受け査定以外の多くの業務に携わった経験を持つ。「何か新しいことに挑戦するのではなく、歴代の代表理事たちが今までに築きあげてきた取り組みの継続に加え、次世代のアンダーライターの育成にも注力していく。そのために自分のこれまでの経験を役立てていきたい」と意気込みを語る同氏に、今年度の取り組みについて聞いた。

星子氏

――代表理事就任の所感を。

星子　私は、所属している住友生命のアンダーライティング部門でほとんどのキャリアを過ごしてきた。当社内はもちろんのこと、生命保険業界にはアンダーライティング分野をけん引してきた尊敬する先輩たちが多くいる。当協会は設立から長い年月を経て、そうした先輩たちから後輩たちにバトンをつなぎながら、さまざまな施策に取り組むことを通じて、安定した組織を構築している。そうした状況をさらに次世代につなぐことが私の役割であり、務めだと思っているので、それに向かって力を尽くしていきたい。

――これまでのご経歴を。

星子　1998年に新卒で住友生命に入社し、支社配属となって2年間勤務後、2000年からはアンダーライティング部門でキャリアの大半を積み上げてきた。当協会は主に引受け査定などの実務者を対象にしているが、私は引受け査定1件1件を行う業務自体の経験数は少ないものの、告知書の電子化や電子手続き、引受け査定前の診査基準の見直し、告知内容・範囲の見直しといった査定を取り巻くさまざまな周辺の業務に関わってきた。こうした経験が少しでも役に立つ機会があればうれしい。

――アンダーライティング協会の概要を。

星子　基本的には、講習会と資格試験を軸に取り組みを進めている。講習会は年5回行っており、生保会社や再保険会社の医師を対象にしたものに加え、近年では医学分野以外のフィンテックやインシュアテック関連の知識を身に付けるものも実施している。資格試験は2008年度から毎年1回実施しており、初級・中級・上級と3種類あるが、上級アンダーライターとして各社の査定の実務の中核人材として活躍できることを目標にしている。

インシュアテック部会や事例研究部会も実施

――どのような組織を目指すのか。

星子　新しい取り組みに挑戦しようというより、これまでに歴代の代表理事たちが築いてきた試験や講習会を引き続き運営していくなか、さらに、学ぶ意欲の高い各社のアンダーライター向けに、会社の垣根を超えて勉強する機会を提供する目的でインシュアテック部会と事例研究部会を継続的に実施している。インシュアテック部会は、年によって異なるものの、それぞれ5～10人のアンダーライターが集まって、インシュアテックに関する知見を高めている。事例研究部会では、特定の疾病に対する医務査定の考え方を研究して、顧問の医師にアドバイスを受けながら研究結果をまとめて最終的に年に1回5月に開催する年次大会で発表している。このように、これまでに歴代のアンダーライティング協会の理事たちが立ち上げて運営してきたことをより良くし、視野を広げて取り組みを進めていきたい。こうした取り組みを継続していくことで、次世代のアンダーライター育成に貢献したいと考えている。

――現在の課題は。

星子　テクノロジーの進化によってアンダーライターに求められる役割は変化してきていると実感している。医学的知識を基本とする伝統的な引受け査定の知識を学ぶことは引き続き必要ではあるものの、アンダーライティング協会として、会員の皆さまがアンダーライティング業務を取り巻く環境変化に適用できるように、時代に適応したサービス提供を可能にすることが近年の当協会の課題だと感じている。

――会員にメッセージを。

星子　保険業界および生命保険会社は、世の中の人たちのセーフティーネットとして、公共性高く一人一人のお客さまの生活に役に立つ有意義な仕事に取り組んでいる。その中で、とりわけアンダーライティング業務については、さまざまな手続きの簡素化や、引受けに関する知識を高めることにより、これまでは引受けできなかったお客さまも引受けできるようになるといった、やりがい、醍醐味を感じられる仕事であるため、高い意識で取り組み、研さんに励んでいただきたいと思っている。そうした文化を先輩から後輩に継承できる組織としていきたい。会員の皆さまにおかれましては、引き続き積極的に当協会の取り組みに参加していただきたい。